



# 美術館 たより

TEL (63) 7788

爽やかな日本画

## 伊藤 彰 耳展

5月29日(月)まで

5月の風のように爽やかな日本画を描く伊藤彰耳展の開催をしています。

小学校の頃より、油絵を描いていた伊藤画伯は高校のときに日本画に出会い、多摩美術大学では日本画科に進みました。

卒業後、中学の美術教師をされたから院展に出品を続けますが、そのたびに落選する苦難の時代を経験しました。不安を感じる中で、日本画を描くしか自分を生かす道はないと教職を離れ、画家の道に専念します。

挫折や不安というものはおそろしく誰にでもあるもので、とても自然なことです。「絵



「ちょっと昔のたたずまい  
新潟会津八一邸」

~美術の話を  
聞きに来ませんか~  
ギャラリートーク

伊藤彰耳画伯を迎えて  
【日時】5月9日(火)14:00

学芸員によるギャラリートーク  
【日時】5月21日(日)10:00

【場所】湯河原ゆかりの  
美術館展示室

【テーマ】「伊藤彰耳展」  
作品解説

【参加料】入館料のみ



「薬師(日光・月光菩薩、薬師如来)」

には絵かきのすべてがこめられている」という画伯の言葉は、それを乗り越えた者の強さや重みを感じさせます。

その後、伊藤画伯は三十三間堂での仏像の写生、恩師との出会いから基本の大切さを再認識し、日本美術院賞・大観賞、文部大臣賞、内閣総理大臣賞と受賞を重ね、現在も活躍を続けています。

## 一喜一憂

春は名のみの風の寒さや

例年になく梅の開花が遅れた今年、天を恨みながら、よくこの歌を口ずさみました。

立春を過ぎてても、雪がちらついた三月上旬の早朝、いつものように大きな袋を片手にごみを拾う人に出会いました。駅構内や街角などで最近よく見かける光景です。「ご苦労様です」と声を掛けると、照れくさそうに、タバコの吸い殻を袋に入れながら頭を下げてくれました。ちょうど部活に急ぐ女子中学生グループが通り掛かり、その中の一人が落ちていた空き缶を拾い、近くのごみ箱に入れました。

オウム真理教が地下鉄サリン事件を起こしてから十年。それ以来、地下鉄駅からごみ箱は撤去され、湯河原駅からもごみ箱の姿は消えてしまいました。危険を理由にしたコスト削減策ともとれます。最近、公園からごみ箱を撤去する自治体も増えてまいりました。そんな世相に逆行し、除間伐材を活用したごみ箱を町内七十箇所設置しました。爆弾の投入は遠慮しますが、せつかく拾ってくれても、捨て場に困ると感じる人も多いと思います。

もし、近くのごみ箱が目につかなかつたら、女子中学生は、空き缶を拾うてくれたらどうか。黙々とごみを拾うお年寄りの姿を目にしたらどうか。こんな気持ちが湧いてきたらどうか。子どもは、親の背中を見て育つと言われますが、ずっと以前にこんな話を聞きました。

K子さんの父親は、三つの会社を経営する実業家で、K子さんは、そんな父親を尊敬していました。ところが、中学三年生の時、父親は事業に失敗し、家も会社も人手に渡り、狭いアパート暮らしになりました。憧れていた私立高校を諦めた上、学校から帰れば、働

きに出た母親に代わって家事をしなければなりません。K子さんは、すべて父親が悪いと、父親に反発するようになり、高校一年生の時、非行グループに入り、家を出してしまいました。しかし、三か月後、彼女は、家に帰りました。その理由をK子さんは、こう振り返っています。

その日は、ちょうど嫌なことがあり、グループのみんながむしゃくしゃしていました。「おい、公園のベンチをもう一つ壊しに行こう。胸がすつとするぜ」と仲間の一人が言い出し、みんな公園に行きました。

ところが、昨日、グループの男子たちが、面白がつて壊したベンチを、一人の男の人が、一生懸命修復しているのです。「おい、余計なことをするなよ」。そう言いながら、男の子たちが近づいて行きました。その後からついて行った私は、あつと驚きました。父親だったのです。その場を逃げようとしても足が動きません。黙々と修理を続ける父の姿、やがて修理が終わわり、ベンチを眺めてにっこり笑う父親を見た時、私は、何もかも忘れて父親のもとに駆け付け、気が付いた時には、父親の胸の中で泣きじゃくっていました。無償で働く父親の姿に、真の愛の心を知ったK子さん。無償の働きを続けてきたからこそ、父親は、娘を立ち直らせることができたのだと思います。

中・高校生時代には、自分たちのために働いてくれる親や社会の人への理解が深まってまいります。それを感謝の気持ちで導くのは、親や社会の役割ではないでしょうか。

五月、六月は、子どもの日、母の日、父の日と続く家庭月間です。親子の絆が強くなる日にしたいだけ願っています。

町長

米岡幸男

